

琉球大学学術リポジトリ

貿易収支と貿易利益

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学国際地域創造学部 公開日: 2019-10-28 キーワード (Ja): 貿易収支, 貿易利益, 比較優位, アブソープション・アプローチ キーワード (En): 作成者: 徳島, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44945

貿易収支と貿易利益

徳島 武

抄録

貿易問題のメインテーマとして貿易不均衡があるが、国際貿易理論における貿易収支は、均衡を前提としている。国際貿易理論における貿易とは、輸出財と輸入財の等価交換である。その前提の下で、比較優位財の生産に特化することで、貿易利益が得られる。

キーワード：貿易収支、貿易利益、比較優位、アブソープション・アプローチ

1. はじめに

貿易問題のメインテーマとして、貿易不均衡が、特に貿易赤字が取り上げられる事が、現実の政治において多々見られる。貿易不均衡と経済的利益とは無関係である事は、経済学の常識と言えるが、それは国際貿易理論における貿易収支が、均衡を前提としている事を、テキストが明示していない事が原因の一つであろう。そこで本論文では、その前提を、マクロ理論とミクロ理論を結合することで明示し、比較優位による貿易利益とは何であるのかを再確認したい。2. で、国際貿易理論における貿易収支が均衡であることを明示し、3. で比較優位による貿易利益を再確認し、4. でまとめる。

2. 国際貿易理論における貿易収支

マクロ理論のアブソープション・アプローチで、貿易収支を捉えてみよう¹⁾。YをGDP、 C_p を民間消費、 I_p を民間投資、Gを政府支出、Eを輸出、Mを輸入、 $A(=C_p+I_p+G)$ を内需(アブソープション)、 $B(=E-M)$ を貿易収支(外需)とすると、

$$Y=C_p+I_p+G+E-M$$

$$=A+B$$

より、

$$B=Y-A$$

となる。 P_N を非貿易財の価格、 X_N をその生産量、 C_N をその消費量とし、 P_E を輸出財の価格、 X_E をその生産量、 C_E をその消費量とし、 P_M を輸入財の価格、 X_M をその生産量、 C_M をその消費量とすると、ミクロ理論である国際貿易理論では、

$$Y=P_N X_N+P_E X_E+P_M X_M$$

$$A=P_N C_N+P_E C_E+P_M C_M$$

となるので、これを代入すると、

$$B=P_E X_E+P_M X_M-(P_E C_E+P_M C_M) \quad (\because P_N X_N=P_N C_N)$$

となる。よって、

$$B=0 \Leftrightarrow P_E X_E+P_M X_M=P_E C_E+P_M C_M$$

である事、すなわち貿易収支均衡と国際貿易理論の予算制約式が同値である事が証明できた。

3. 比較優位による貿易利益

国際貿易理論が貿易収支均衡を前提としているという事は、その理論における貿易とは、輸出財と輸入財の等価交換であることを意味している²⁾。貿易による交易条件の改善が、比較優位財の生産の特化³⁾による資源の最適配分の結果としての生産額の最大化(所得効果)と、よりバランスの取れた消費(代替効果)の、生産と消費の貿易利益をもたらすのである。但し、これは貿易財市場におけるものであり、非貿易財市場は含まれていない点は、注意しなければならない。

4. おわりに

本論文では、貿易収支均衡と国際貿易理論の予算制約式が同値である事が証明できた。すなわち経済学的には、貿易不均衡と貿易利益は無関係である事が証明できた。貿易利益を考える際は、輸出財と輸入財の交換の利益、すなわち資源の再配分による生産額の増加と、消費の多様化による消費者の満足度の上昇を、考察の対象とすべきである。

注

- 1) 国際収支統計では、正確には貿易・サービス収支である。
- 2) これにより、交易条件が輸出財 1 単位と輸入財の交換比率であることが示される。
- 3) 生産要素が完全雇用されるので、1 生産要素では完全特化であり、2 生産要素では不完全特化となる。

参考文献

- 伊藤元重・大山道広（1985）『国際貿易』、岩波書店
岩本武和（2012）『国際経済学 国際金融編』、ミネルヴァ書房
大川昌幸（2015）『コア・テキスト 国際経済学 第2版』、新世社
小川栄治・岡野衛士（2016）『国際金融』、東洋経済新報社
小川英治・川崎健太郎（2007）『MBAのための国際金融』、有斐閣
奥村隆平（1989）『改訂版 変動為替相場制の理論』、名古屋大学出版会
小野善康（1999）『国際マクロ経済学』、岩波書店
河合正弘（1994）『国際金融論』、東京大学出版会
国際通貨研究所編（2012）『外国為替の知識 第3版』、日本経済新聞出版社
———（2018）『外国為替の知識 第4版』、日本経済新聞出版社
小林尚朗・篠原敏彦・所 康弘編（2017）『貿易入門』、大月書店
齋藤 誠・岩本康志・太田聡一・柴田章久（2010）『マクロ経済学』、有斐閣
清水順子・大野早苗・松原聖・川崎健太郎（2016）『徹底解説 国際金融』、日本評論社
須田美矢子編（1992）『対外不均衡の経済学』、日本経済新聞社
高木信二（1992）『入門 | 国際金融』、日本評論社
武隈慎一（2004）『マクロ経済学の基礎理論』、新世社
竹中平蔵・小川一夫（1987）『対外不均衡のマクロ分析』、東洋経済新報社
田中鮎夢（2015）『新々貿易理論とは何か』、ミネルヴァ書房
多和田 眞・柳瀬明彦（2018）『国際貿易』、名古屋大学出版会
辻 正次・田岡文夫編（2010）『現代国際マクロ経済学 [改訂版]』、多賀出版
中西訓嗣（2013）『国際経済学 国際貿易編』、ミネルヴァ書房
秦忠夫・本田敬吉・西村陽造（2012）『国際金融のしくみ 第4版』、有斐閣
平島真一編（2004）『現代外国為替論』、有斐閣

- 深尾光洋(2010)『国際金融論講義』、日本経済新聞出版社
- 藤田誠一・岩壺健太郎編(2010)『グローバル・インバランスの経済分析』、有斐閣
- ・小川英治編(2008)『国際金融理論』、有斐閣
- 藤原秀夫・小川英治・地主敏樹(2001)『国際金融』、有斐閣
- 二神孝一・堀 敬一(2009)『マクロ経済学』、有斐閣
- 松林洋一(2010)『対外不均衡とマクロ経済[理論と実証]』、東洋経済新報社
- 矢野恵二(1989)『開放マクロ経済学の展開』、白桃書房
- 若杉隆平(2009)『国際経済学 第3版』、岩波書店
- Dornbush,R.(1980)*Open Economy Macroeconomics*,New York:Basic Books
- Feenstra,R.C.(2016)*Advanced International Trade second ed.*,Princeton University Press
- Gärtner,M.(1993)*Macroeconomics Under Flexible Exchange Rates*,Harvester Wheatsheaf
- Isard,P.(1995)*Exchange Rate Economics*,Cambridge University Press
- Krugman,P.R. and M.Obstfeld(2000)*International Economics Theory and Policy fifth ed.*,Addison-Wesley
- Mankiw,N.G.(1994)*Macroeconomics second ed.*,Worth Publishers
- Mark,N.C.(2001)*International Macroeconomics and Finance*,Blackwell Publishers
- Mundell,R.A.(1968)*International Economics*,The Macmillan Company
- Obstfeld,M. and K.Rogoff(1996)*Foundations of International Macroeconomics*,MIT Press
- Pitchford,J.(1995)*The Current Account and Foreign Debt*,Routledge
- Turnovsky,S.J.(1997)*International Macroeconomic Dynamics*,MIT Press
- Van der Ploeg,F.(ed.)(1994)*The Handbook of International Macroeconomics*,Basil Blackwell